

ICT 活用を充実させるための実践コミュニティのマネジメント — ICT 活用の事例、アンケートによる教師と生徒の変容 —

熊崎 敦子 柘植 良雄
羽島市立中央中学校 岐阜聖徳学園大学教育学部

Management of the Practice Community to Enhance the Application of Information and Communication Technology: Case Studies in ICT Applications and Changes Found from Teacher and Student Survey Results

Atsuko KUMAZAKI, Yoshio TSUGE

キーワード：ICT 活用 ロイロノート オンライン授業 実践コミュニティ マネジメント

I. はじめに

1. 実践研究の背景 —急速に進む「GIGA スクール構想」と現場の動き—

「GIGA スクール構想」とは、「Society 5.0」の時代を生きる子どもたちの「個別最適化され、創造性を育む教育」を実現させるために、1人1台の端末と高速通信環境の整備をベースとした施策である。¹⁾ 2019年、GIGA スクール構想の発表当初、文部科学省は「GIGA スクール構想の実現へ」のリーフレットで、1人1台の端末と高速大容量の通信ネットワーク環境の整備を取り組みの中心に位置づけ、2023年度までに、1人1台端末の整備を掲げて取り組みが進められた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により新たな生活様式への対応を余儀なくされて、端末と高速通信環境の整備の導入は急加速することとなった。

羽島市立中央中学校（以下、本校と省略）でも、2021年2月には、生徒1人に1台の端末が配備され、通信ネットワークの工事や周辺機器の整備などが急ピッチで進められた。数年前から教師用端末と生徒用50台ほどの端末は配備されていたものの、教師の意欲や知識、教科の特性によって活用状況には偏りがあった。写真や動画を撮影して生徒に見せたり、インターネットの資料映像や教材をTVモニターに提示するなどの活用がほとんどであり、2割程度の職員が活用していた。

2021年4月から本格的に生徒がタブレットを使い始め、教育活動で使用するためにはさらに準備が必要となり、課題も日々浮き彫りになっていった。8月末にはコロナ感染拡大による緊急事態宣言下の休校や分散登校により、前年度までには実施していなかった「オンライン学習」を進めることになった。生徒の「学びを止めない」ために、急な変化や対応に追われながらも、学校現場では試行錯誤しながらICT活用を進め日々努力を重ねているところである。

2. 実践研究の目的

そこで本研究では、教務主任である筆者が、日々急速に進む現場のICT活用にかかわる実践コミュニティのマネジメントを実践し、ICT活用推進による教師や生徒の変容を明確にし、日々の実践に生かしていくことを目的とする。

II. 実践研究の内容と方法

1. ICT 活用にかかわるさまざまなマネジメントの実践事例

- (1) 教材、周辺機器などの環境整備
- (2) ICTを推進する実践コミュニティのマネジメント

2. アンケートによる ICT 活用における教師、生徒の学びの変容

- (1) 生徒対象の「オンライン学習についてのアンケート」の実施
- (2) 職員対象の「ICT を活用した授業についてのアンケート」の実施
- (3) 生徒対象の「ICT を活用した授業についてのアンケート」の実施

Ⅲ. 実践内容

1. ICT 活用にかかわるさまざまなマネジメントの実践事例

(1) 教材、周辺機器などの環境整備

①英語科の要望による備品購入のマネジメント

2021年4月、新年度が始まってすぐに英語科主任よりタブレットで使用するイヤホンとタッチペンの購入の要望があった。テスト的に端末を使用していた全教科の中で、すでに英語科は積極的にタブレット端末を授業で活用していた。授業の導入段階での単語テストや発音の録音、生徒と教師の課題提出のやり取りなどである。加えて異動してきた教員の実践経験により、より効果的に ICT を活用するための必要な備品だという要望からであった。100円均一の物品で十分精度がよく、全校生徒分を学習費で揃えるには最適なことからすぐに要望が通ると考えていた。

特に多忙を極める時期のため、教務として筆者は実物見本を用意したり、教材検討資料を作成したりして協力した。教材検討会議で100円均一のイヤホンの精度は認められたが、予備を含めた全校生徒分約430個が一度に揃うのかどうか、故障や不良品はないか、壊れた時の保証はあった方がいいのではないか等、課題が挙げられ一時保留となった。また学習費で備品を購入するために、郵送費の出どころや領収書、購入店舗についても会計規約に沿って進めなければならないため、事務や業者との確認に時間がかかった。正規の文房具店に見積もりを頼むと10倍の値段となり、また希望の備品購入を進めるために不良品や保証の対応を再考した。不良品については、管理職に相談してPTA会費で予備購入ができるよう対応をお願いした。事務や管理職への交渉、業者の連絡先などの情報を集めて課題解決を図り、購入の見通しがもてたところで英語科主任に引き継いだ。備品が届くまでにはさらに品が廃盤になっていたり、数が揃わなかったり、郵送料や領収書などに困難があった。今後も同じものが手に入らなかったり、段取りに手間がかかったり、いろんな問題が予想される。

このように ICT 周辺機材については、使用頻度が少ないうちは必要性がわからず、前例がないことから一から対応を考えていかなければならない。市からの配備はなく、学校独自で今後も購入を検討していくことになる。これまでになかった ICT の活用推進への急ピッチな対応が求められる今、改めてそれにかかわる環境を同時に整えていくことの必要性を感じている。教務としては、さまざまな場面において臨機応変なマネジメントが求められる。

②オンラインの学習の実施にかかわる環境整備と実践コミュニティのマネジメント

コロナ感染拡大防止のための緊急事態宣言により、8月末から9月頭にかけての3週間は自宅待機、分散登校となったため、オンラインでの学習のために ICT 活用が進められた。ただ本校は家庭へタブレットの持ち帰りは推進していなかったため、初日の分散登校でタブレットを持ち帰ることになったが、オンライン等の準備は間に合っていない状態だった。

緊急主任会で、どのように進めていくかを検討する中で、本校校長の ICT 活用への推進の意欲や、職員の中にも ICT 分野に長けている教員がいることにより、急務のオンライン実施のさまざまな計画や準備を比較的短い時間で進めることができた。ここで、ICT に詳しいこのような「思考リーダーとなる人材」²⁾の有無で、学校現場の進展は大きく異なることを学んだ。専門的な知識や興味をもつ教員が各学校全てに配置されているわけではないと考えると、「思考リーダー」を発掘、もしくは育てる必要があるとそれだけで時間がとられる。ICT の推進の原動力となるものとして非常に重要で、それだけで初期スタートはスムーズに行われ、知識や技術は周りに伝達され広がりをもち、新たな人材が育つことを身近に感じることができた。また ICT の専門ではなくても、知識や人をつないだり役割や段取りを計画したりして、組織をマネジメントする人材も必要だと知り、筆者はその視点で ICT 活用へのかかわりを実践していきたいと考える。

マネジメントの視点から、オンライン学習を実施するために「環境整備」「教師」「生徒」に対してどのような準備が必要かを書き出して整理し、役割分担をして全職員で協力しながら準備を進めた。(表1)

表1 オンライン学習を始めるまでの必要な準備

環境整備（得意な教員）	教師（学年・担任）	生徒（家庭）
<ul style="list-style-type: none"> ・家庭の通信環境の調査 ・生徒用タブレットのアプリ用意 ・接続アカウントの取得 ・教師用パソコンの設定 ・授業時の配信用周辺機器の準備（機材の制作、備品購入） 	<ul style="list-style-type: none"> ・オンライン学習、分散登校の時間割作成 ・オンライン学活、学習内容の計画 ・生徒への連絡準備（オンライン上） ・機材の配線、設定方法、操作方法の研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭の通信環境 ・通信環境のサポート ・生徒が一人で接続できるための操作指導 ・連絡を受け取る手段

家庭の通信環境の状況は全校生徒400名余りの内99.2%の生徒が家庭での通信が可能だということがわかった。通信環境が整わない生徒は、登校してオンラインに参加できるように配慮した。学年ではオンラインに接続するためのZoomのアプリのダウンロードやパソコン設定を行う教員、生徒への連絡メモを作成する教員と分担した。授業配信時のスタンドは複数必要となり、私物を持ち寄ったり、職員が自作したスタンドを活用したりした。(図2)



図2 職員による自作の機材（スタンド）

(2) ICTを推進する実践コミュニティのマネジメント

① ICT活用推進委員会

タブレットやロイロノート（市内統一アプリ）など、授業での教師のICT活用を促進させるために新たに「ICT活用推進委員会」を位置づけた。初めて研究主任を務める教員を中心に、各学年一人ずつ選出された若手教員で構成されている。そこに教務、管理職が加わり話し合いを進めることとなった。筆者は第1回の会議の前に、研究主任から構成メンバーや進め方について相談を受けた。異動してきたばかりの教員もいて何から始めればよいか思案し、自己紹介とともにこれまでのICT活用の実践を紹介するようにした。話を進める中で、方向性を見つけるために、KJ法で付箋にこれまでの活用方法や課題点、メリット、デメリットなど、ICT活用に向けて思うことや考えを書き出して分類を行った。(図3)

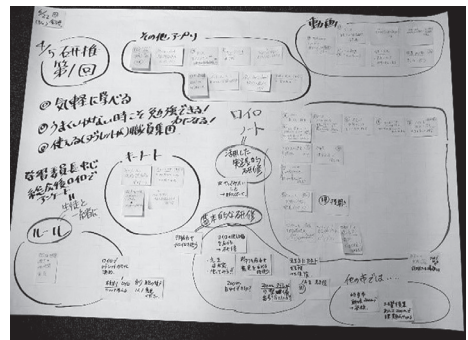


図3 KJ法によるアイデアの分類

メンバーが互いを知らない中であつたが、誰もが自分の意見を数個書き出し、自分の意見を位置づけることで、共通のものを見つける安心感や共有性を生むことにつながり、所属感がうまれた。

2021年7月の国語科全校研究会と日常的なICT活用の授業に向けて、整備しなければならない項目が分かってきた。分類してみると次のようにいくつかの視点でまとめることができる。

- i) 基本的な操作の習得（教師と生徒）
- ii) ロイロノートを活用した実践的な研修（実践交流や研修の案内）
- iii) タブレットを使用する際の校内の約束の検討（生徒主体）
- iv) その他 便利なアプリの導入、周辺機器の整備

ここから2021年度の本校のICT活用のスローガン「気軽に学べる」「うまくいかないときこそ勉強できる」「タブレットが使える職員集団になる」ができた。そして早速取り組めることとして、毎週月曜の職員打合せで職員全員参加の「タブレットミニ研修会」を実施することが決まった。最後の5分間を気軽にタブレットを触り、操作に慣れながら少しずつ使える研修の場として設定した。

(3) ICT 活用の教員研修のマネジメント

①タブレットミニ研修会

初回は校長がタブレットで校長通信を配信し、全職員がタブレットで操作しながら研修が進められた。研修会は毎週月曜日の打ち合わせの残り5分間で行うこととした。当初は端末が充電されていなかったりプロジェクターの設置を忘れていたりしたが、回を重ねるうちに定着していった。時間がないときは「今日は研修あるのかな」という空気も流れたが、研究主任や筆者が積極的に働きかけをして継続して研修をする雰囲気を作った。

研修の内容は、初めは校長や推進メンバーが先生役、職員が生徒役となって、資料箱からのデータ配布や検索の仕方など、ロイノートの基本の操作から行った。始めは端末上で資料を取り出すだけでも時間がかかったが、隣同士で教えあってスムーズに操作できるようになった。少しずつアンケートの作成や共有画面での提示など、より授業で活用ができる方向へと向かい、模擬授業を行うことへ変化していった。(図4) 授業実践が進むと職員が持ち回りで授業実践を紹介し、交流し合うように発展させた。職員仲間がタブレットを活用して授業に挑んでいる姿は伝わり、「これならできそうだ、やってみよう。」という活用意欲となっていった。全職員が同じ目標に向かって、毎回タブレットを覗いたり触ったりしている姿から、教師と一緒に学んでいこうという思いを共有することができた。「触ってみよう、使ってみよう」のレベルからさらなる発展を求めて、研修の方向についての職員アンケートを実施した。

このミニ研修会は ICT 推進メンバーをつなぐ核となる動きの1つとして定着しつつある。メンバーは学年の中で ICT 推進を担い実践をリードすることを自覚し、右の図で示す「コア・グループ」³⁾(図5)のメンバーとなって課題や解決策を提示したり、学年を率先したりしている。さらに ICT 推進の動きが活発になるためには ICT 推進のコミュニティに「リズムを生む鼓動」⁴⁾が必要だと感じた。

②「鼓動」となった教育事務所管理訪問での ICT 活用の授業公開

ICT 活用の動きが定着してそれに勢いをつけたのが、2021年6月の教育事務所管理訪問であった。2020年度はコロナ禍となり、研究の動きが作れない状態であったため、今回は久しぶりの指導略案を作成した授業公開となった。本校の研究内容に関わる視点「ICTの積極的な活用」「主体的で対話的な学び」「深い学びをつくりだす交流」から1つ選択して全職員が指導略案を作成した。全職員の8割近くが「ICTの積極的な活用」を取り上げ授業公開を行った。多くの授業でタブレットが机の上に出され、その活用法も日頃の交流にはない工夫された授業実践となっていた。

特別支援の家庭科では、前時の作業工程が写真にとっており、工夫したことや苦勞したことがレポートとなっていて、本時は何に気をつけてどこから作業するとよいか、想起しやすいように工夫されていた。

美術では、「羽島市をテーマにした和菓子」を作成していた。色の工夫を課題としてモチーフを映し出して作品の参考にしたり、作成前後の作品を撮影して見比べ、工夫した点やよくなった点などをプレゼンし、今日の学習を振り返る実践であった。(図6)

国語では「伝えたいことを文章にする」という単元で、ねらいをもって生徒がアンケートを作成し、学級の仲間に質問をする学習を行っていた。集計結果をもとに今後、自分の考えを文章にまとめ、発表していく。



図4 ミニ研修会でタブレットを触るベテラン教諭

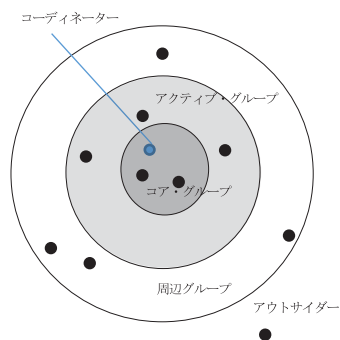


図5 コミュニティへの参加の度合い



図6 美術科の実践の様子

多くの教員が自分の教科や学習内容に合わせて ICT の活用方法を模索し、活用しようという意欲が高まる機会となった。今後、このような実践例を広めさらに内容を高めていきたい。

③ ICT を活用した国語科全校研究会

国語科全校研究会において、ICT 活用推進委員会で「ICT の効果的な活用」について指導案をもとに検討を行った。ここではタブレットの画面に生徒が考えを書き込むことで話し合いに意欲的に参加できるか、シートの色を変えて立場の違いがわかる工夫は、生徒が話し合いの中で考えを再構築し、対話的な学びにつながるかを検討した。事前研では実際に職員が生徒役となって、ワークシートを使用した授業の意図を共通理解することができた。

授業では、考えを書き込んだ生徒のワークシート（図7）が一斉に画面に集められ、シートの色から一目で意見の違いを把握し、そこから自分の考えや仲間との違いを主張する全体交流がなされた。「対話的な学び」の手立てが有効であったかについて、事前にタブレットに評価表を配布し、参観教員が即時評価を行いそのデータをもとに研究会で討議する仕組みを取り入れた。研究会では3つのグループに分かれ、タブレットで撮影した生徒のワークシートや動画を示しながら、具体的に研究内容を評価したり手立てが有効であったかをグループ討議したりして、ロイロノートを活用した発表の場とした。

④ 「オンラインの学習」実施による ICT 活用への意識と技術が高まる講習会と実践コミュニティ

8月末から3週間のオンライン学習の導入により、教師集団の ICT 活用に向かう意識の高まりが急加速した。どのようなネットワークでオンライン学習を進めるかの構想は、実践コミュニティの中心メンバーが考えていった。それに加えて、必要な機器や設置方法、通信方法などを整理しながら、各学年の ICT 推進メンバーに動きや情報を伝え広めていくようにした。特に動線確認で代表学年が実際に活動する教室で機材を設置し、他学年が生徒役としてタブレットを接続し、通信環境や音声確認、動作確認をすることでそれに関連する疑問が出てきて、その度に講習会を開くような形となった。（図8、図9）これまで以上に教師集団が ICT 活用のための技術を習得しようと、意欲的に参加する姿が多く見られた。この数日で ICT 関連の知識や技術の高まりは目を見張るものだった。

休校中のオンライン学習の形態は、(i) 学年全体での短学活 (ii) 学級担任による短学活 (iii) 教科担任による期末テスト対策 (iv) オンラインで学習の姿を映す自主学习があった。分散登校では学年で半分の学級が登校し、さらに密を避けるため1学級を2つの教室に分けて、隣の教室で行っている授業を個々のタブレットに配信して共有した。（図10）自宅待機の学級にも同じ授業を見られるようにしたり、学年の実態に合わせて自主学习をしたりして工夫して実施した。午後から家庭学習のときには、オンラインのブレイクアウトを利用して

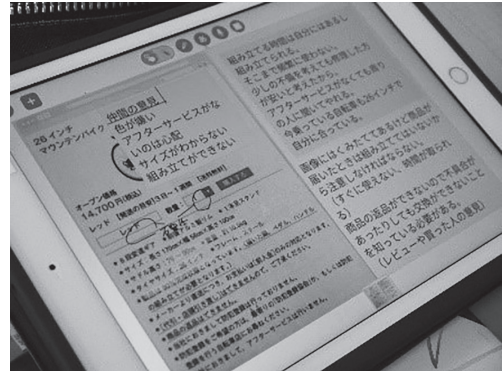


図7 一目で同じ意見がわかるよう色分けをしたワークシート



図8 ICT 活用講習会の様子



図9 動線を確認しながら質問に答えていく様子

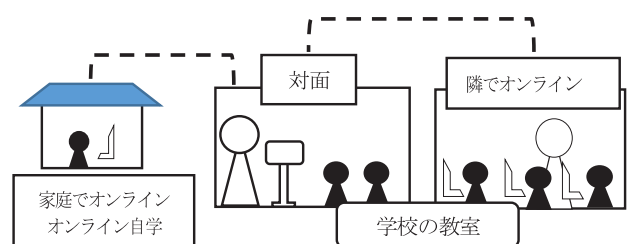


図10 分散登校時のオンラインの仕組み

教育相談を進め、オンラインで担任と生徒が1対1で相談や談話できるように計画した。

3週間のオンラインの学習を終え、全校生徒に「オンライン学習についてのアンケート」を実施した。(表2、図11、図12) 回答率は61.1%で、全校生徒406名中、250名から回答があった。(3年生84名、2年生86名、1年生80名)

表2 オンライン学習で感じたり思ったりしたこと、困ったこと (自由記述)

- ・午前だけで学習が終わるのは不便、午後からは自宅でZoomを使い自学をするなどして欲しい。
- ・オンラインより通常の授業の方が身につけている気がする。
- ・教室に来ていない人のために、授業を録画してロイロノートに掲載して欲しい。
- ・雑音が入り、先生の声や発表の声が聞きづらい。
- ・黒板の赤や黄色のチョークの重要なところが見えにくい。
- ・自宅でのオンライン学習は、自習ではなくて授業をして欲しい。

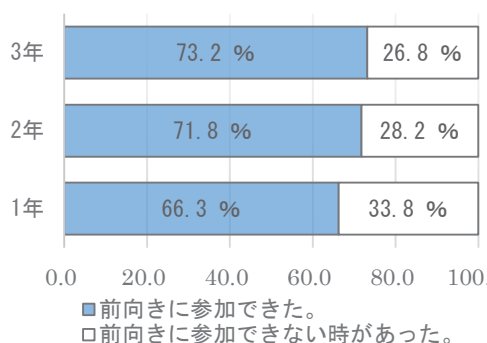


図11 家庭でオンライン学習に、前向きに参加できたか

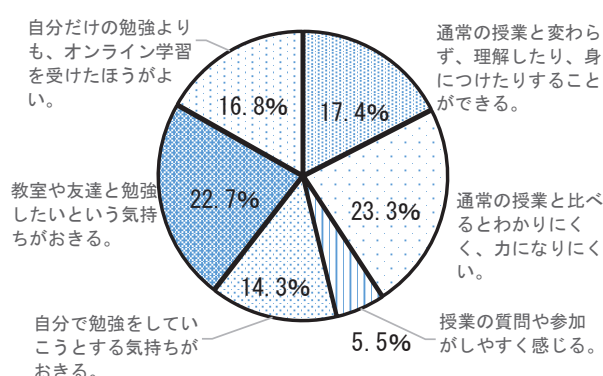


図12 オンライン学習について当てはまるもの全て選ぶ(複数選択)

2. アンケートによるICT活用の教師、生徒の学びの変容

(1) 職員対象の「ICTを活用した授業についてのアンケート」の実施

実施時期：2021年度前期終了時の打ち合わせ(10月上旬)

対象者：職員 教科指導をしている教員24名(回答率90%)

調査方法：ロイロノートによる選択、自由記述アンケート

①教科指導のICT活用のおおよその頻度(図13)

「前期の教科指導において、ICT活用(ロイロノートなど)はおおよそどのくらい活用したか。」についてのアンケートでは、「ほぼ毎日」と答えたのは17%、「時々」14%、「あまり」は7%であった。

②ミニ研修会について質問をしたことについて、以下の回答があった。(表3、表4)

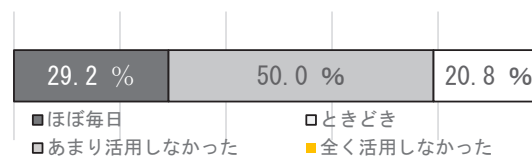


図13 ICT活用はどのくらい活用したか

表3 ミニ研修会で参考になったこと (自由記述)

- ・初めは正直億劫だったけど、繰り返しの研修によって「やれそう。」「やってみよう。」と気持ちに変化していき、チャレンジする事ができたから。
- ・あまり使えていないので、時間が短くてももう少し丁寧に研修できる機会がほしい。
- ・他教科、いろいろな先生の実践を聞いて、実際に見たり体験したりできたことで、自分の教科にどう取り入れられそうかイメージを膨らませることができたから。
- ・自分が既に実践していることが出てきていることが多かった。
- ・レベルに追いついていないところがある。各教科によって活用が可能なものとそうでないものもあり、できるところから取り組んでいる。

表4 さらに ICT を活用していくためにどのようなことを学びたいか。(自由記述)

- ・シンキングツールの活用方法
- ・教科に特化した内容が知りたい
- ・いろいろな実践を知り、自分に使えそうなものにチャレンジしたい
- ・教育現場に取り入れてもよいアプリの幅を広げて欲しい。研修先で役立つアプリを教えてもらえるが、タブレットには無く、申請したら入れられるかもわからないので、研修で終わってしまう。
- ・いろいろな先生の「できない」「こうしたい」ということの交流がしたい。

(2) 全校生徒対象に「前期の ICT を活用した授業」アンケートの実施

実施時期：2021 年度前期終了時の帰りの会 (10 月上旬)

対象者：3 年生徒 131 名、2 年生 111 名 1 年生 80 名 特別支援学級 8 名 合計 330 名

調査方法：ロイロノートによるアンケート

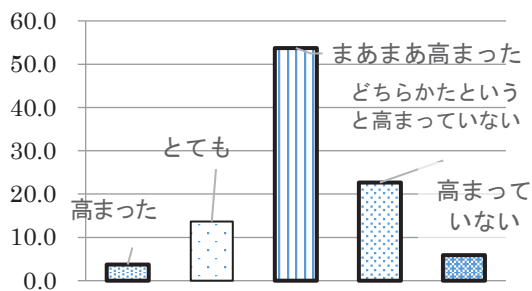


図 14 学習の意欲は高まったか

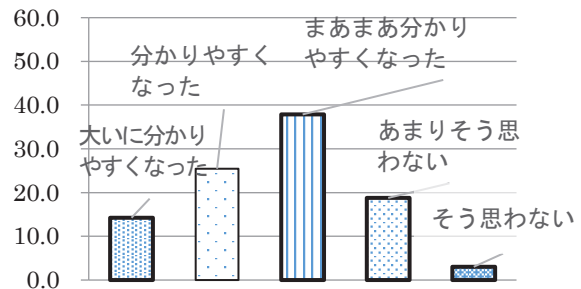


図 15 学習がわかりやすくなったか

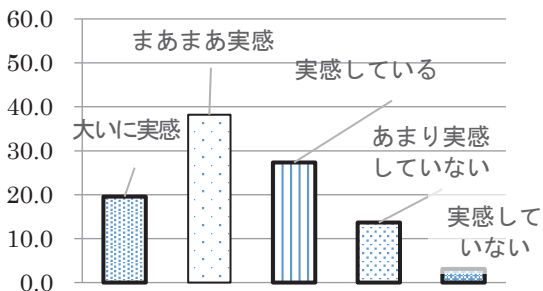


図 16 学びの広がり、深い学びの実感

「ICT (タブレットやテレビ画面を使った授業) による学習意欲の向上」のアンケートでは、「高まった」「とても高まった」「まあまあ高まった」を合わせると 73.3%となり、「どちらかという和高まっていない」22.7%、「高まっていない」6.2%、となった。(図 14)

「学習はわかりやすくなったか」のアンケートでは「大いにわかりやすくなった」「わかりやすくなった」「まあまあわかりやすくなった」を合わせると 79.5% 「あまりそう思わない」が 19.3%、「そう思わない」が 3.1%という結果となった。(図 15)

「学習の広がり、深い学びの実感について」は、85.1%が「大いに」「まあまあ」「実感している」と答えている。(図 16)

表5 どんな時に学習意欲が高まったか (自由記述)

- ・意見を交流する時に仲間の意見がすぐに見られるのでとても便利だと思う。
- ・ネットだから単語を調べるときとかわかりやすい。一回一回先生を呼ばなくて済む。
- ・提出して添削されて返ってくる時、英語で発音が分かった時。
- ・授業中の挙手が苦手なので、タブレットのおかげで学習に参加できるようになった。
- ・撮影や録音することで、何度も見返せる。そして、発言できなくても自分の意見を先生に送ることが出来るので、自分の意見を見てもらえれば安心するいい活用方法だと思う。
- ・今までよりも遥かに多くの情報が手に入り、それらを使って考えることができるようになった。
- ・英語で自分の声を録音して聞いたり、体育で動画を撮ってもらったりしていつもだったら見られなかった自分の動きが見られるようになったとき

IV. 考察・分析

文部科学省による急速な ICT 活用の推進によって、通信環境や周辺機器の整備、ICT を活用した教育活動が一気に加速し、環境整備や教員の指導力、指導方法などさまざまなものが手探り状態で進行している。今回の実践から ICT 活用推進には特に「環境面」と「思考リーダーとなる人材」⁴⁾が不可欠であ

ると感じた。また ICT 活用を推進するために生まれた実践コミュニティをいいものにするためには、人や情報、考えをつないで組織を活性化させるマネジメント力が重要であるとわかった。

学校現場では日々 ICT にかかわる真新しい動きへの対応に追われている。その勢いの中で少し立ち止まり、教師や生徒によるアンケートを分析することは、現段階の成果とともに実践の課題や改善点に目を向け、これからさらに効果的で意味のある ICT の活用へつながるのだと考えることができた。

教師のアンケートからは「タブレットミニ研修会」の方向性を見出すことができた。それぞれの求めているものを取り入れながら、さらに ICT 活用について知識や技能を高め、学びを止めない教師集団＝実践コミュニティをよりよいものに発展させていきたい。

生徒のアンケートから ICT 活用による「学習意欲の向上」について「高まった」「とても高まった」「まあまあ高まった」と感じる生徒は全体の 73.3%をだした。タブレットによって生徒たちの学習への意欲が高まっていることが分かった。分からないことをすぐに調べられることや仲間の考えが一目でわかる利便性などが意欲につながるということを確認することができた。

また「学習は分かりやすくなったか」については、「大いに分かりやすくなった」「分かりやすくなった」「まあまあ分かりやすくなった」を合わせると 79.5%となった。さらに、「学びの幅やの広がりや、より深く学べる実感」については、「大いに実感」「まあまあ実感」「実感」と答えた生徒を合わせると 85.1%となった。ICT 活用よっての効果を実感している。よって、教師は一人一人の理解力の向上につながるよう、ICT 活用の指導方法の工夫や効果のある事例を学び、教員の指導力の質の向上を目指した研修が必要だと考える。

教師と生徒のアンケートの記述からは、教師が感じている ICT 活用の学習への距離より、生徒が感じている ICT 活用の学習を受け入れる距離の方が圧倒的に身近であるということを感じた。しかし、オンライン学習のアンケートには「オンライン授業について当てはまるもの」の中に「通常の授業と比べるとわかりにくく、力になりにくく感じる。」や「教室や友達と勉強したいという気持ちがおきる。」と回答する生徒も多くいた。自由記述には「自宅でのオンライン学習は、自習ではなくて授業をして欲しい。」といった要望があり、生徒の学びを止めないためにもこれまでの学校で対面して学習する効果と、ICT の効果をうまく織り交ぜながらよりよい学びになるよう活用していくことが、生徒の学習意欲や理解力につながり、よりよい資質を高めることにつながると考える。

V. 課題

以上の実践をもとに、見えてきた本校の課題と今後の方向は次のようである。

- ・ ICT 活用に向けての意図的な実践を継続すること
- ・ 理解力や主体的、対話的な学びにつながる効果的な ICT 活用、指導力を身につける研修方法を工夫すること
- ・ 核となる人材の発掘、育成、外部の人材の活用を考えること
- ・ ICT 活用における実践コミュニティを観察し、必要なサポートをしてマネジメントを進めること

現場では ICT 活用にかかわる動きが日々進化している。その勢いに飲まれぬよう私たち教師は新たな分野の学びを止めないことが求められる。生徒たちの方が教師よりタブレットの知識や操作が上回ることもあっても、タブレットを活用しながら教えることについては教師として誇りをもち、生徒に力をつけさせる効果的な活用ができるよう、ともに学んでいく教師集団でありたい。

注・文献

- 1) 文部科学省 (2021) : GIGA スクール構想について、
https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm, 確認 2021 年 10 月 5 日.
- 2) エティエンヌ・ウィンガー, リチャード・マクダーモット, ウィリアム・M・スナイダー (2002. 12): コミュニティ・オブ・プラクティス, 野村恭彦 監修, 野中郁次郎解説 / 櫻井祐子訳, 翔泳社. 第四章 発展の初期段階—実践コミュニティの計画と立ち上げ, 111-146.
- 3) 2) に同じ. 第三章 実践コミュニティ育成の七原則「三. さまざまなレベルの参加を奨励する」, 91-110.
- 4) 3) に同じ. 第三章 実践コミュニティ育成の七原則「七. コミュニティのリズムを生む出す」, 91-110.